

「手習い」イギリス文化論

第9回

～農村で出会った“かっこいい”もの達～

北海道大学創成科学共同研究機構
明治乳業「乳の価値創造研究」寄附 研究部門 博士研究員

小林 国之

どういふ経緯だったのか覚えてはいないが、いつからか牧羊犬というものに興味を持っていた。広い牧草地の上で、羊の群れを相手にハンドラーとの共同作業で羊を集めるその姿に無性に憧れを抱いていた。今回のイギリス滞在。実は隠れた大きな目的の一つに、本場の牧羊犬を見てみたいというものがあつた。牧羊犬を始めとして、人間と犬との関係を広く観察してやろうと思っていた。

イギリスにきてまもなくの頃、そのころの習慣だった本屋通いをしていたときに、ふと白と黒の犬が表紙の本が目に入った。“How to speak to a dog” 犬との話し方と題されたその本を、内容よりも表紙買いた。この表紙の犬が、牧羊犬として活躍しているボーダーコリーという品種である。イングランドとスコットランドの国境近くで生まれたこの犬種は、一日何十キロも走ることができるというその体力と、羊を追うときの集中力のすばらしさから、牧羊犬として使われているというのが、犬の図鑑によく載っている説明の文句である。

犬とのコミュニケーションの取り方を色々と説明したこの本であるが、なかに当時の私が強く同感できた言葉が書いてあつた。犬は、人間の言葉の話すことはできないが、人間の言葉を

小林 国之(こばやし くにゆき) 氏



- 1975年 北海道に生まれる
- 2003年3月 北海道大学大学院農学研究科博士課程
後期課程修了(博士(農学))
その後、北海道大学大学院農学研究科
研究員を経て
- 2004年4月 日本学術振興会特別研究員(酪農学園
大学酪農学部所属)
- 2007年4月 北海道大学創成科学共同研究機構
明治乳業「乳の価値創造研究」
寄附 研究部門 博士研究員

◆主な著書

『農協と加工資本』～ジャガイモをめぐる攻防
(株)日本評論社 2005年

かなり理解することができる、という言葉である。当時、ネイティブの話を徐々に理解することができはじめていた私にとって、思ったことを言葉にすることの難しさを日々実感していた。犬はしゃべれないけどもわかっているんだよ、という言葉が私の気持ちを代弁してくれていると感じた。

イギリス人にも、家庭犬としても人気があるこの犬種の様々なグッズなどもうられている。街中でもよくボーダーコリーを見かけていたが、やはり本当に牧羊犬として働いているところを見てみたい。そのために、Sheepdog trialという、競技会に行くことにした。イギリスにきて五ヶ月ほどがたった、初秋のある日曜日のことである。牧羊犬の競技会とは、もともと牧羊犬の品種改良と技術の向上を目的に、実際の牧羊家がそれぞれの技術を披露する場としてイギリス全土の農村で開催されてきたのである。ハンドラーと呼ばれる人間が牧羊犬に言葉や犬笛などで指示を送りながら、羊を集めながらゲートを通過させ、最後にPenと呼ばれる柵の中に追い込むまでの正確性とタイムを競うものである。



競技会会場風景

牧羊犬ならぬ牧羊豚が活躍する映画「ベイブ」を見た方は、その競技の概要がおわかりいただけると思う。この競技会は牧羊家にとつての技術向上の場ではなく、古くから娯楽・スポーツとしての側面も持ってきた。以前には毎週末に全国どこかで開催されている競技会がテレビ中継されていたらしい。現在も時折中継される競技会は、典型的な農村風景の一つである。

競技会は国際大会と銘打たれていた。ISDSという団体の大会で、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドからそれぞれ代表が選出され競うというもので、競技は三日間にわたり、イギリス中西部、イングランドとウェールズの国境近くにある産業革命にゆかりのある Ross-on-Wye という小さな村で開催された。エクセターから車で約三時間のドライブである。

訪れたのは大会の最終日であった。会場には耕作していないとおもわれる土地を使った駐車場があり、車が二百台以上、会場にはいろいろなテントが並び食べ物やボーダーコリーグッズなどを販売している。

会場内にはボーダーコリーを連れた人達が大勢いる。よく訓練されたボーダーコリーというのは、ハンドラーと強い信頼関係で結ばれている。そしてその信頼関係は外見からもしっかりとわかる。飼い主がいつ指示（コマンド）を出すかわからない、

犬は常に飼い主の側にびったりと寄り添い、顔を見ているからである。会場内にはそうした信頼関係で結ばれたいくつものペアを見かけた。やや薄汚れたハンチングをかぶり深緑のベストを着た初老の男性にびったりと寄り添う二頭のボーダーコリー。家の中で日がな一日ティーを飲みながらごろごろしていれば、奥さんに邪魔にされ、孫達にもそろそろ嫌われ始めそうなおじいさん。ところがひとたび羊飼いのシンボルである杖を持ち、使い込んだハンチングをかぶって家の外に出れば、厳格で信頼されるハンドラーなのである。やや失礼な勝手な想像がふくらんだ。



さて、最終日である当日は、前二日の予選を勝ち抜いた人達によるチャンピオン大会が開催されていた。前日までは Brace という二頭使いの競技なども行われていた。

当日の競技は、十頭ずつ二つに分かれた群れを一頭のボーダーで集める、というものだ。ハンドラーは基本的には四つのコマンド「止まれ」「進め」「右回り」「左回り」で犬を操りながら、羊の群れを自分の思うように移動(ドライブ)させる。

ハンドラーからの羊の距離は八〇〇ヤード(約七〇〇m)。人間の目でもほとんど見えないようなところにいる羊に向けて



飼い主にびったりと寄り添ってあるく2頭のボーダーコリー



中央に見えるのが羊を入れる柵。中央の上に見える雑木林の向こうから羊を集めてくる

犬を操る（「look back!」）、という恐ろしくむずかしそうなコマンドを受けた犬は、遙か彼方にいる羊の向けをめがけて走り、集めてくる。最初の十頭の群れを途中にあるゲートを通わせながら、shedと呼ばれるハンドラーのいる近くにある一定の範囲内に集める。その後、その群れを放っておいて、今度は逆の方向、八〇〇ヤードのところにいるもう一つの群を集めに行く。この羊を放っておく、というのが非常にむずかしいのである。優秀な牧羊犬になるには、目の前にいる羊を睨み続けることができる集中力が必要である。何があっても視線をそらさない高い集中力が、こうした「放っておく」際には邪魔にもなりうるのだ。この集中力は、ボーダーコリーが本能的にもっているものであるが、それをあきらめさせ、別の仕事に掛からせるのは、ハンドラーの日頃の訓練である。

ふたたび「look back!」という指示を受けた犬は、今度は別のところにいる群れを集める仕事だな、ということを理解する。もう一つの群れ、こちらも丘の上にかすかに見える程度である。さらに、犬と羊の群れの間には雑木林があり、犬は直線的に群れに進むことができない。林を迂回しながらその奥の丘の頂上にいる群れへと犬を導いていかなければならないのである。何頭かの犬は、群れにたどり着く前にいくべき方向を見失っていた。

それほど遠くまでハンドラーと犬の距離が離れてしまうと、人間の声では届かない。犬笛の音が人間の意志を犬に伝えるのである。



出番を待つボーダーコリー

その群れも同じようにいくつかのゲートを通してスタムにあつめる。二十頭の一つになった群れを、再び三つのゲートをドライブさせてから、今度は群れの中から印が付けた五頭だけを分離して、柵の中に入れる。犬とハンドラーがうまく呼吸を合わせながら、群れの中から印の付いた羊だけを絞り出すように引き離して柵の中に入れていくのは、素人から見ても高等技術だということがわかる。

◆ ◆ ◆
 トライアルのコースの周り、ハンドラーが位置する場所の近くには観客席が設けられ、沢山の人が声援を送っている。客席以外にもコースの周りには沢山の人が犬と人間の共同作業を見ようと取り囲んでいる。競技の合間にうろろしていた私は、競技を終えて役目を終えた羊たちが集められている一角にたどり着いた。臆病な彼らにとって、「白と黒の素早く動く奴」に追いかけるというのは、うれしい体験とはいえないであろう。未だ興奮冷めやらぬといった様子で柵の中にひしめき合っていた。

その柵の近く、コースの中に、一人の老人と一頭のボーダーコリーがいた。次の競技者なのかなと思っていたがどうも様子が違う。しばらくして謎が解けた。彼らは競技が終わったあと



熱心に競技を見つめる観衆

の羊たちを柵に集める係なのだ。競技が終了するまでじつと待ち、終了と同時に素早く羊たちを柵に集める。競技会のスムーズな運営には、もたもたすることは許されない。正確に静かに役割をこなしていく姿は、競技会に参加しているハンドラー達よりも高い技術が要求されるのではないかと思われた。舞台裏に、真の実力者を発見したような気がして、牧羊犬「文化」の深みを知らされた。

青少年の部も同時に開催されていた。彼らは圧倒的経験の差があるベテランのハンドラーの技術を目の当たりにしながら、自分たちもあんな風になりたいとおもいながら研鑽を重ねているのであろう。牧羊犬の技術はこうした競技会を通じて確実に次の世代へと受け継がれているのだ。今ヨーロッパの農業はEUの政策がかわり、牧羊業のなかでも傾斜地や気象条件の厳しい地域にある畜産農家は厳しい状況にある。豊富な経験を持つ「かつこいい」老人達が見守る中で、その技術の盗み、超えようと次の世代、そしてそのさらに下の世代が切磋琢磨をする。伝統が伝わっていくその過程を、目の当たりにしたような期がした。年寄りがかつこいい社会では、伝統とはごく自然に受け継がれていくものなのだ。